

公益財団法人 一般用医薬品セルフメディケーション振興財団
平成 27 年度啓発事業等報告書

啓発事業テーマ 学校薬剤師と養護教諭が協働で発信するセルフメディケーション
啓発事業等実施報告者 小平市学校薬剤師会会長 福田 早苗

要旨

1. 啓発事業等実施目的

小平市学校薬剤師会は、小平市薬剤師会と協働して、医薬品の適正使用に関する基礎知識の定着、薬剤師の職能啓発を目指して小中学校における『お薬教育』を推進し、低年齢時から医薬品の特性およびその正しい使い方について段階的に繰り返し教育することを試みてきた。その結果、市内の小中学校 27 校、全校において学校薬剤師がかかわる教育活動を定着させることができたが、その一方で保護者に対して『医薬品の適正使用』への認識を高めたり、ケガや体のトラブル時における実践的なスキルを啓発したりすることが課題となった。

この課題の攻略のために、日々学校で児童生徒の心と体のケアに関わる機会の多い養護教諭との協働を模索する中で、養護教諭もまた、保健室に常備する医薬品の選別や、ケガや体調不良を訴える児童生徒への対応、保護者への情報提供に苦慮していることを知り得た。

そこでこれまでも小平市学校薬剤師会では、養護教諭の保健室に常備する医薬品の選別ポイントやケガや体調不良時のケアの方法、さらに保護者への医薬品の適正使用やセルフメディケーションのポイントの啓発活動をサポートするために情報提供を試みてきたが、今回この活動をさらに充実させるために、改めて養護教諭の保健室活動をサポートする資料を再編・配布し、さらにその活用方法を啓発する普及活動を行うこととした。これにより、学校薬剤師が参加する児童生徒への『お薬教育』が単発の授業による知識の習得のみで終わらせるのではなく、それを基に学校薬剤師と養護教諭が協働して保健室対応の中で『医薬品の適正使用』や『セルフメディケーション』に関する情報を発信することで継続的に、かつ実践的に教育することが可能となり、さらに児童生徒のみでなく保護者に対しても医薬品の適正使用への認識向上やセルフメディケーション普及への貢献ができるのではないかと考えた。

2. 啓発事業等実施方法および内容

2-1 保健室から養護教諭が発信するセルフメディケーションツールの作成

① 養護教諭に対しアンケート調査の実施

時間的な制約もあり、協力を得やすい状況にあった 4 地区《小平市・大田区（大森地区）・町田市・武蔵村山市》において、アンケート調査を行った。これにより保健室の常備医薬品の選択や、日々の保健室対応で困っている事柄を抽出した。

② 保健室常備医薬品の選別やその適正使用、保健室対応から発信するセルフケアやセルフメディケーションのポイントをまとめた啓発ツールを作成

2-2 作成した冊子とその有効な活用法を養護教諭に啓発

- ① 講演活動の実施
- ② アンケート調査にご協力いただいた地区の養護教諭への配布
- ③ 都道府県薬剤師会、および学校薬剤師会へ作成した冊子を発送し、それぞれの養護教諭部会への啓発普及を依頼
- ④ その他、関連団体への発送

3. 啓発事業等成果

3-1 保健室から養護教諭の発信するセルフメディケーションツールの作成

- ① 養護教諭に対するアンケート調査の実施

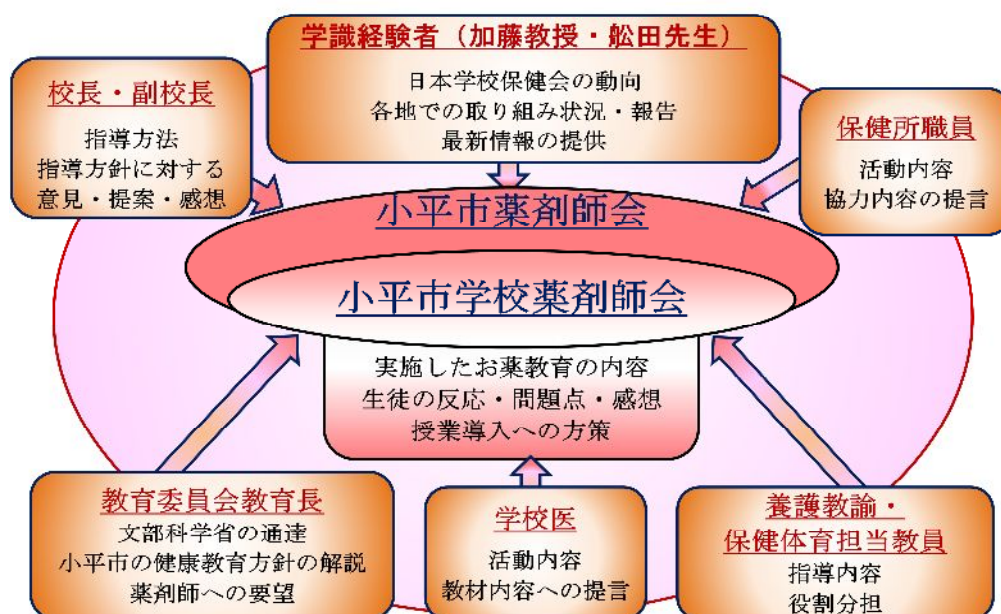
小平市（小学校 19 校、中学校 8 校）、大田区（大森地区小学校 9 校、同中学校 3 校）、町田市（小学校 30 校、中学校 13 校）、武蔵村山市（小学校 7 校、中学校 4 校）、全 93 校（小学校 65 校、中学校 28 校）においてアンケート調査にご協力いただくことができた。

【資料 1】

- ② 保健室から養護教諭が発信するセルフメディケーションツールの作成

小平市薬剤師会のおくすり教育検討委員会メンバー（全て小平市学校薬剤師会会員）が中心となり、上記のアンケート結果より得られた情報や、これまで小平市学校薬剤師会で作成してきた資料等を参考に、内容の検討、調整を行いツールのたたき台を作成。これを基として小平市薬剤師会が主催している『おくすり教育検討会』（図 1）にて、薬剤師のみならず、小児科医、歯科医師、養護教諭などよりご意見、ご要望をいただきつつ検討を重ねた。また、学識経験者として参加していただいている東京薬科大学の加藤教授や、実際に臨床に携わっていらっしゃる小児科医の辻先生、歯科医師の古屋先生にもそれぞれの専門性を活かしたコラムを執筆していただけることになった。

〔 図 1 〕 小平市薬剤師会が主催する『おくすり教育検討会』



このようなプロセスを経て、保健室から養護教諭が発信するセルフメディケーションツールである『学校薬剤師が提案する 保健室常備医薬品&保健室のセルフメディケーション』（全36ページ）の作成に至った。

[資料2：装丁デザイン、目次、サンプルページ添付]

3-2 作成した冊子とその有効な活用法を養護教諭に啓発

① 講演活動

日時：平成28年1月28日（木）14：30～16：00

場所：町田市役所

対象：養護教諭〔町田市小中合同養護部会（60名程度）〕

演題：『保健室で使用する薬品や手当のあれこれ』

演者：小平市学校薬剤師会 福田早苗

この段階において、『学校薬剤師が提案する 保健室常備医薬品&保健室のセルフメディケーション』は製作の途中段階であったため、この内容を踏まえた配布資料、スライドを作成し、講演を行った。

- ② アンケート調査にご協力いただいた地区の養護教諭への配布準備中。
- ③ 都道府県薬剤師会、および学校薬剤師会へ作成した冊子を発送し、それぞれの養護教諭部会への啓発普及の依頼準備中。
- ④ その他、関連団体への発送準備中。

4. 考察およびまとめ

一般消費者が自らセルフメディケーションを行うには、その中心的役割を担う医薬品に対する基本的な知識と適確な判断力が必要となる。その基礎作りに貢献することを念頭に小平市学校薬剤師会では平成14年度から小平市の小中学校での『おくすり教育』活動がスタートした。平成23年度にはその実施率がほぼ100%となり、小平市教育委員会においても小平市学校保健会においても薬剤師が行う『おくすり教育』は高い評価を受けるまでに至った。しかし、その中で見えてきた課題は、小学校で一回、中学校で一回の授業のみではその内容を知識として定着させることや、行動変容に至るまでの影響力を維持させることの難しさ、そして保護者教育の重要性であった。そこで学校の中で日々児童生徒の健康教育に取り組む養護教諭と協働することにより、継続的、かつ実践的に正しく安全に医薬品を使うことを啓発し、セルフメディケーションという営みの実践につながる活動展開ができるのではないかと考え、今回の啓発事業のテーマとした。

しかし、今回行ったアンケート調査の結果や講演前にいただいた質問内容から養護教諭もまた保健室に常備するのに適当な医薬品選びや、けがや体調不良を訴える児童生徒に対し適確な対応を行うことへの不安や迷いを抱えていることが改めて浮き彫りとなった。また、学校内ではほぼ行われていない内服薬の使用が校外学習時や宿泊行事においてはその使用の可能性もあることへの戸惑いなども伺うことができた。

これらのことを勘案し、まず養護教諭が自信を持って保健室対応を行うために現在の医療における見解を基盤とした保健室での活動指針が必要であることを感じ、『学校薬剤師が提案する 保健室常備医薬品&保健室のセルフメディケーション』を作成した。これにより通常は保健室で使用する機会の少ない内服薬を含めた医薬品の正しい知識や使用方法への理解を深め、非薬物的ケアから薬物的ケアまでを一連の流れとして把握していただくことや、保健室で養護教諭自身がセルフメディケーションを実践し、さらに養護教諭が児童生徒や保護者へセルフメディケーションを発信する際の参考資料として活用していただけることを期待している。

本書の作成にあたり、実際にセルフメディケーションに携わる薬局薬剤師のみならず、それぞれの職種の立場から専門性の高いご意見、ご提案をいただいたことは、この企画をした私たちにとっても大変大きな収穫であった。東京薬科大学の加藤教授からは医薬品やその制度に関することはもちろん、冊子を作成するにあたって学術的な視点からのご助言をいただくことができた。また、小平市で開院されている小児科医の辻先生からは医師としての立場からセルフメディケーションの実践的アドバイスやその限界、受診の際の注意事項など、極めて有用性の高いご助言をいただき、同じく小平市で開院されている歯科医師の古屋先生からも口腔衛生管理の重要性やその効果的な管理方法、成長期にある児童生徒の口腔衛生環境が身体全体の健康状態へ及ぼす影響についてご教示いただくなど、専門性の高い多職種が一堂に会してセルフメディケーションについて検討し、討議する機会を得られたことは、大変貴重な経験であったと感じている。

このように『学校薬剤師が提案する 保健室常備医薬品&保健室のセルフメディケーション』の作成に多くの時間と労力を費やしたため、現段階における本書の啓発活動はまだ不十分な状態であるが、現在準備を進めている各都道府県薬剤師会や学校薬剤師会、学校保健関連の組織への発送などにより、積極的に啓発普及活動に努めると同時に、その内容についてのご意見、ご要望を集積し今後の活動内容やその方向性を検討したい。そして、次代を担う児童生徒たちへのセルフメディケーションの啓発と普及のために学校薬剤師という立場からできる活動をより充実させ、その推進と定着に貢献したいと考えている。

このたびの活動を通し、東京薬科大学の加藤哲太教授、小児科医の辻千秋先生、歯科医の古屋和子先生をはじめとする大変多くの方々にはいただきましたご支援やご協力に対し、大変大きな感動を覚え、心より感謝の意を表します。また、このような貴重な経験をさせていただく機会を与えてくださいました公益財団法人一般用医薬品セルフメディケーション振興財団に対しまして、心より深謝いたします。